

湖国で輝く 企業を 訪ねて



見えない力に背中を押されて 花火職人に

大仙市の大曲新作花火大会2015で銅賞を、諏訪湖で行われた全国新作花火競技大会で長野県知事賞を獲得した「ここに咲く紫陽花の華」。これまで花火で出すことは難しいとされてきた、鮮やかな青色の紫陽花が夜空に花開きました。

この打ち上げ花火を出展したのは長浜市にある滋賀県唯一の花火工房、株式会社柿木花火工業で、3代目の柿木博幸社長は、25歳の時、大手企業を辞めて家業を継ぐためこの道に入りました。

「友人が若くして亡くなったりしたこと、『自分は何のために生まれてきたのか、これからどう生きていくのか』といろいろ考えるうちに、祖父と父がやってきたことを絶やさないといいのではという思いを抱くようになりました。ちょうどその頃、全国から煙火業者が集まる研修会に父のお供をする機会があり、日本を代表するような花火職人の方々と親しく言葉を交わしたことで、自分にもこの仕事ができるのではないかと思うようになりました」と語る柿木社長は、当時のことを「見えない力に背中を押された」と表現します。



たゆまぬ**創意工夫**から生まれる 奥深い打ち上げ**花火**の魅力

株式会社 柿木花火工業



本社／滋賀県長浜市本庄町388
創業／昭和26年4月
従業員／5名（夏期花火従業者 30名）
事業内容／煙火（エコ花火）製造・販売、
総合プロデュース、玩具花火の卸・小売販売、
鳥獣威嚇商品の販売等

代表取締役
柿木 博幸氏



静岡の大手花火工場で5年間修業を積み、その間、村祭りの小さな花火の打ち上げから大きな花火大会まで経験したほか、指導のため中国の花火工場にも出向き、文化の違いに戸惑いながらもさまざまな体験を重ねて滋賀に戻りました。

価格競争に負けないエコ花火を開発

ところが、修業を終えて、滋賀に戻り花火づくりを始めてみると、すぐに壁にぶつかります。価格競争に巻き込まれて、大幅な値引きをしないと受注できない状況に、柿木社長は「何か特徴がないと安価な中国製の花火には太刀打ちできない」ことを痛感します。

強みにできるものはないかと模索していた時に、以前から気になっていた打ち上げ花火の燃えカスのことを思い出し、打ち上げた後の廃棄物が少ないエコ花火を開発できないかと考えるようになります。打ち上げ花火にはもみ殻やクラフト紙などが使われていますが、燃え残って地上に落ちてくるものも多いことから、これらを減らすことができればエコを強みにしていけるのではないかと、柿木社長の試行錯誤の日々が始まりました。

身のまわりにある材料で何か使えるものはないか、とにかく



やってみるといふチャレンジ精神で、もみ殻の代わりに植物の種を微粉末にして用いると、ほとんど燃えカスが残らないことを発見しました。また、「玉皮」という外側の球体に、従来の紙の代わりに燃え残っても土に還る生分解性プラスチックを使うようになりました。

こうしてさまざまな工夫を重ねた結果、燃えカスを従来の花火の15分の1くらいに減らしたエコ花火が完成しました。「開発までに4年かかったので、信用保証協会とのお付き合いがあったおかげで、低い利率で研究開発費が調達できてとても助かりました」と言う柿木社長。

打ち上げると従来のものより大きな輪になることもあって、特徴ある独自の花火として、環境ビジネスメッセにも出展してPRに努めた結果、大きな値引きをしなくても契約が取れるようになりました。

滋賀ブランドの打ち上げ花火を全国に

毎年、花火職人が色や形を工夫した新作打ち上げ花火を発表する

コンテストが、全国各地で行われています。新作の開発は、まず調合の異なる複数の火薬を地上で燃やして、出したい色に近いものを2〜3つ選んで試作用の花火を作っては打ち上げを繰り返し、思い描いた色や形が出るよう火薬の配合や詰め方を研究します。

実際に打ち上げてみると思うような色が出ないことも少なくないため、新作花火の開発にはアイデアと経験のみならず、時間と研究開発費が必要になります。

前出の青い花火も繰り返している挑戦の中で偶然できたもので、青色を美しく出すには通常の温度よりはるかに低い1200度くらいで燃焼させなくてはならないことから、技術的に難しくなかなか開発できませんでした。

開発の進め方や改善方法などは、柿木社長がサラリーマン時代にQC活動などで実践したことがとても役立っているそうで、工場近くの田んぼで打ち上げた試作花火を、近隣の住民に協力を依頼してシートで評価してもらい、これを新作開発の参考にしています。

また、同社では県の自然環境保全課の紹介で、コクヨ工業滋賀と連携してヨシ紙を玉皮に貼った花火を開発しました。打ち上げの翌日には、燃えカスの状況を調査し、持ち帰ってどのように分解されるかをチェックしています。

工場のある地域は積雪が多く、湿気を嫌う花火を製造する期間が限られています。現在ものづくり補助金を申請して、急速乾燥機の導入によって作業期間を伸ばし、より多くの花火を作りたいことを計画しています。

「今はエコ花火が欲しいと同業者から引き合いがあっても、応えることができませんが、増産できるようになれば、滋賀ブランドとしてもっと全国に発信・展開していけると考えています」と言う柿木社長。女性や若者を雇用して人材育成に取り組みながら、花火づくりの技術を次の世代に伝えていきたいという言葉から、仕事への熱意と誇りが伝わってきました。



今後の予定

| | |
|--------|-----------------|
| 7月 23日 | びわ湖ヨシ松明まつり2016 |
| 30日 | 中山道柏原宿やいと祭 |
| 8月 4日 | 長浜・北びわ湖大花火大会 |
| 6日 | コトナリエ2016 |
| 14日 | 近江大浦花火大会 |
| 20日 | 猪名川花火大会 |
| 25日 | 長浜・木之本大花火大会 |
| 9月 3日 | 長浜あざいあっぱれ祭り2016 |

企業ポリシー

- 滋賀ブランドの花火を全国に発信する。
- 花火づくりの技術を次世代に継承する。
- 感動で人をつなぐ場づくりをお手伝いする。

Message

人と人をつなぐ感動体験の創造をめざして

先日、修学旅行で滋賀県内に宿泊していた高校生のために、先生からのサプライズで花火を上げました。感動してたくさんの生徒たちが泣き出したのを見て、素晴らしい思い出づくりのお手伝いできたことをとてもうれしく思いました。

何万人も集まるような大きな花火大会は、警備の難しさなどからだんだん少なくなっていますが、自治体や地域の小さなイベントで花火を上げることが増えています。人と人、人と地域をつなぎ、思い出や感動を共有していただく場づくりに、これからもお役に立つことができたいと思っています。

